子どもたちへのまなざし（19）

静かにするのが好き

松井　とし

幼稚園が歴史を閉じる年のこと、最後の一クラスとなった子どもたちの修了式も間近となったある日、私は子どもたちの顔を見ながら「幼稚園で楽しかったことはなあに？」と語りかけた。

「運動会」「いもほり」「春のつどい」「クッキー作り」等と、それぞれに印象深かった行事をあげる子どもたちの中で、A子は凛として「静かにするとき」と言った。日ごろ活発で、ハスキーな声がひときわ大きいA子の発言。みんなが注目する中で、重ねて「どういう時だったの？」とたずねる私に、A子は少しはにかむように首をかしげながら、しばらく考えて「わからない」と答えた。

最近、いろいろな幼稚園を尋ねるたびに、この場面が思い出される。教育要領の改訂を機に、幼児の主体性を尊重するといった保育が展開されるようになってきている。確かに

活気に満ちているが、しかし、考えさせらる場面に遭遇することも多い。たとえば降園前、喧騒の中で「今日どんなことをして遊んだの？」と聞く教師の声もだんだん大きくなり、慌ただしさが募る。子どもたちは、せんせいが立ったまま弾くキーボードに合わせて声を張り上げて歌い、そして身支度もそこそこにワァーと帰っていく。そんなに広くはない空間に隣合わせのごっこ遊び。ボリュームいっぱいにそれぞれのテープレコーダーからバックグラウンドミュージックが流れ、まさに音の洪水。

あの時A子が「静かにするとき」という表現で言いたかったことは、どういうことだったのだろうか？もしかして、ひとりで絵本を見てイメージの世界に浸っていたり、毛糸の「織物」に集中していた時のことだったろうか？　それともみんなで集まり、ストーブの上でお湯がシュンシュンたぎる音や風の音を聴きながら、読んでもらう物語に耳を傾けていた時のことだったろうか？　みんなで考えを出し合ってお話作りをしたり、相談ごとをした時に感じた集団の中での充実や、温かさを表したかったのだろうか？

人々が安らぎを求める現代、非常にゆるやかなテンポの「アダージョ」というCDがよく売れているという。静かにさせられるのではなく、静かにする。子どもたちも、ほっとして自分を取り戻すひとときを求めているのではないだろうか。

（元幼稚園教諭）